

…… みんなの広場 ……

さあ、リフレッシュ

デイズニーの魅力に誘われて



五味 俊夫

(さくら市立熟田小学校長)

〒264-1111 栃木県下野市 板橋中学校長

一 はじめに

「長期休業中は、十分心身ともにリフレッシュしてください。」と全職員に夏休み前、職員会議で伝えた。ただし、私を知る友人から言わせると、

「五味さんは毎日が、リフレッシュですよ。何でもやれるし、ストレスなんてない人間だよ。」というフレーズが、酒席などでは飛び交う。

この理由を説明するとまた長くなるので割愛し、こんな私に似つかわしくない「テーマ」の原稿依頼を市教育会長から受けて迷いつつ、熟慮の末、「デイズニーの魅力」で書

くことにした。

二 初めてデイズニーランドの地を踏む

思い出せば、この「高嶺の花」的ランドに手を伸ばせる時が、開場五年後に訪れる。長男が誕生し三歳になった夏休みである。

周到な準備、プラス決死の覚悟をしながら、夏休みの最終週に浦安へ向かった。当時、「携帯電話」はなく、「カーナビ」も普及していない時代に、栃木県人(?)が首都高を走るということは体操競技「D難度」の技に挑戦するくらいに難しいものであった。

「俺は車では、南(東京)は行かない。」と言いつつ切っていた自分への大きな試練であった。分厚い道路地図を妻に持たせ、「カーナビ」代わりに妻のボイスが、「右、そこは左」などと車内に響く。車の多さと首都高の分岐に戸惑い右折したところ、車は「銀座」方面に向かっていた。戻りたくても戻れないのが首都高。迷走しながら、何とか湾岸線に入り目的のデイズニーランドに到着。

「すごいな。ここは夢の国だ。」という印象以上に、首都高を運転できた満足感の方が強

かったと思う。

三 適応指導教室とデイズニー

年号が「平成」になり、栃木県内では不登校児童生徒が千人を超えた。私は当時、中規模小学校で四年を担任、体育主任を任されていた。教員になって十年、充実した日々を過ごしていた時に、「適応指導教室」担当の話は寝耳に水であった。

矢板市の適応指導教室で四年間、約三百名超の児童生徒との出会いと関わり合いの中で、常に私が考えていたことは、

「学校がデイズニーランドになれば、不登校はなくなる。」と、いうことであった。ただし、言うは易いが現実的は「学校のデイズニーランド化」など、現実不可能、夢の中の夢の話と思いつつ、昨年度までは考えていた。

四 「Happinessな学校」作りに着手

四年間の適応指導教室担当から一七年目の今年度、頭の中で温めてきたデイズニーランド構想を実現する年がやってきた。

安倍首相にならない、「ハピノミクス」と称